

## 報 告

# 萩市 D 地区独居高齢者の生活課題に着目したインタビュー調査

梅木幹司\*1 志村哲郎\*2

キーワード：独居高齢者、生活課題、過疎

## 1 はじめに

近年の高齢化に伴い、独居高齢者世帯は全国的に増加し続けており、萩市においても平成 27 年 3 月末現在 9,452 世帯と総世帯数に占める割合として 39.3%を示している。今回、インタビュー調査を行った地区においても独居高齢者世帯の割合は、ほぼ同様の数値を表している。

また、2025 年には団塊世代の最後尾の人たちが後期高齢者となると言われている。国は、医療や介護が必要となっても、住み慣れた地域でいつまでも暮らし続けることができるよう、医療や介護等を包括的に提供する仕組みである地域包括ケアシステムを推し進めようとしている。この地域包括ケアシステムは、制度的サービスだけでなく地域がもつ力にも着目しており、互助の仕組み、いわゆる地域住民同士の助け合いなどについてもシステムの一部に位置付けようとしている。地方都市においては、住民同士の助け合いが未だ成立しており、地域住民同士のつながりがあると思われがちであるが、前述のような独居高齢者世帯が増加している現実からすると必ずしもそのようなことを語ることはできない。

本稿は、地方都市の独居高齢者の生活課題を今後明らかにするための手がかりとして、萩市の D 地区（中山間地域に位置し、人口減少が著しい地域）にお住まいの独居高齢者に対してインタビュー調査を行った記録である。今回のインタビュー調査では少数を対象としているが、彼らの貴重な語りを通じて、独居高齢者の生活実態を明らかにするためにも本稿において報告したいと考える。

## 2 研究方法

### 2-1 調査協力者

2014 年 5 月～8 月に、萩市の中山間地域で過疎化が進んでいる D 地区の独居高齢者 2 名（男女 1 名ずつ）とこの地区に嫁いで 35 年になる女性（以下 C さんとする）の計 3 名に対して、聞き取り調査を行った。C さんは、この地区にある寺の住職夫人であり、地区のことについては詳しく、地区内の何人かの独居高齢者との交流もある。今回ご紹介いただいた 2 名については、その寺の檀家でもある。

### 2-2 調査方法

1 名 40 分から 70 分程度の半構造化面接を実施した。調査協力者へはインタビュー中、IC レコーダーへ内容を録音させていただくことをお願いし同意を得た。インタビューは、それぞれ複数回実施する予定とし、今回はその 1 回目であることについて調査協力者への理解を求め、同意が得られた。今回のインタビューは、調査の目的を理解してもらうこと、また今後もインタビューをお願いすることから、信頼関係を構築することに努めた。

### 2-3 倫理的配慮

インタビューを実施するにあたり、調査協力者には調査内容の記録などを含めプライバシーには配慮し、個人が特定できない内容とすることを文書と口頭により伝え同意を得た。また、インタビュー中、特に答えたくないことに関しては答えなくていいこと、インタビュー途中であっても中止することが可能であることも同様に伝えて同意を得ている。

\*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

\*2 元山口県立大学大学院 健康福祉学研究科

表1 調査協力者について

仮称	性別	年齢	職業	家族の状況	備考
Aさん	男性	82歳	農業	子ども3人	17年前に妻は他界
				長男（県内他市在住）	若いころから従事してきた農業は、
				長女（市内在住）	子どもたちから体のことを思い禁
				次女（中部地方在住）	止され、現在休止中とのこと
Bさん	女性	82歳	無職	子ども3人	17年前に夫は他界（脳梗塞を亡くな
				長男（県内他市在住）	る10年前に患い、亡くなる前の5
				長女（県内他市在住）	年間に入退院を繰り返す）
				次女（中部地方在住）	農地所有
Cさん	女性	57歳	無職	夫と息子2人の4人家族	夫は、当該地区にある寺の住職

※3名の年齢は、インタビュー調査時のもの

## 2-4 分析方法

今回のインタビューの内容を分析するにあたり、ICプレーヤーに録音させていただいた内容をテープ起こしをし、文字化した逐語録を作成した。そしてこの逐語録から、Aさん、Bさんについては、「現在の暮らし」、「家族との関係」、「現在の困りごと」、「今後1人暮らしが維持できなくなったら」、「D地区について最近思うこと」の5つのテーマについて分類した。これらのうち「現在の暮らし」については、食生活について、毎日楽しみにしていること、病院への通院、農地の維持・管理について、訪問者の存在の5つを構成要素とした。それぞれのテーマについて2人に共通していることなどを中心に考察を行った。

また、CさんについてはCさんから見た現在の地区の様子についてを中心に語っていただくことができたため、そのことについての考察を行った。

## 3 結果および考察

萩市D地区は、平成17年の合併により、萩市に移行した地区であり、萩市の中心部（旧萩市街）から車で約20分の位置にある中山間の過疎の進んだ

地区である。この地区の人たちの多くは農業に従事しているが、高齢化が進み、子ども世代はそれを継ぐことなく他県に移住し、農地の維持を公社に委託する家も増えているとのことである。

まずは、この地区に住むAさん、Bさんの語りからみていきたい。

### 3-1 現在の暮らし

Aさんは、天気が悪い時以外は毎日出かけている。しかし、聴力が低下していること、足腰も少し弱っていることを様子から読み取れた。これらのことにより、子どもたちから農業と車の運転は禁止されている。しかし車はAさんの移動手段として、また地区の状況からみても運転せざるを得ない。Bさんは敷地内の畑で自分で食べる野菜を作ることが日課であり、一日中自宅で暮らすことはないとのことであった。また現在持病があるものの健康であることが読み取れた。

#### ・食生活について

Aさん

「米は炊きよりますが、あの一皿は、まあ作ったのを買うてきたり、あの近所に親戚がありますから、その人らがようしてくれますから、

いろいろ差し入れしてくれまして、私は、助かっちゃいますけど。」

Bさん

「野菜は自分で作りますが、やっぱり時には、あの一魚やなんか、ほしゅうなりますわね。ひやから、あの一今の100円市の隣に、生活センターってのがあからねえ、あそこでねえ、ちょっと作ったのを美味しいときには買ったりしよります。」

食生活については、2人とも自立していた。男性のAさんは、料理はしないが、近所に親戚があり差し入れを頻繁にしてもらっていること、そして車が運転できることで毎日惣菜を買いに行くことが出来、食生活が維持できていた。またBさんについては、野菜を作っており、それを料理して食べること。また、良い野菜が出来た時は、それを近くの100円市場に売りに行き、そのついでに生活センター（自宅から約1キロ離れたところ）に惣菜や魚などを買いに行くこともあるとのことであった。食生活は、生活の中でも基本であり、現在は2人とも自立した生活のもとで維持できている。しかし、Aさんについては車が運転できなくなったとき、そして現在差し入れをしている親戚も高齢のため、今後それが不可能になった時、Bさんについては歩いて買い物に行くことができなくなった時には、現在の食生活は維持できなくなる。

#### ・毎日楽しみにしていること

Aさん

「まあ、気分の転換にもなろうと思って市街に毎日のように車で出よりますし、週に1、2回はゲーボールに出よります。それが楽しみちや楽しみです。」

Bさん

「散歩にねえ。ええ、へたら色々な人に出会ってね。話したりすればね、ちょっと気がまぎれますから。はい。」

2人とも毎日楽しみにしていることとして共通している点は、外出による他者との交流であった。そして、日々の生活について気分転換を必要としていることもわかる。独居生活で、多少の寂しさもあるようだ。

#### ・病院への通院

Aさん

「私は、大体持病が心臓病でありまして、あの一若い頃から不整脈が。月に1回は、市街の病院に車を運転して行きよります。」

Bさん

「血圧がちょっと高うて、別に異常ないよって言われるけど、まあまあと思って、40日に1回、市街の病院にバスで行きよります。」

2人とも元気そうであるが、持病があり定期的に通院していることがわかった。また、2人とも近くの診療所ではなく、車やバスで市街の病院まで通院していることもわかった。それは、専門医に診てもらっていることと、長く通院していることにより医療機関との信頼関係が出来ているからであった。しかし高齢のため、それぞれの持病からいつ倒れるかわからないという危険性をもっていることもわかる。元気だから今は大丈夫ということではなく、行政などによる定期的な見守り活動も必要である。

#### ・農地の維持・管理について

Aさん

「耕作放棄ちやおかしいけど、そういうことは全然子どもも『するな動くなまた心配なが』ちゅうて言いますから、それこそ何にもしません。親戚が近くにおりますから、それがやってくれます。」

Bさん

「田んぼや、はあー、畑はまあね、ぼちぼちするけど、田んぼはみんなあの農業公社でありますよね。それに今やってもらいます。」

この地区は農業が中心の地区であり、2人とも先

祖や夫から受け継いだ農地を何とかして維持したい気持ちがある。しかし、高齢になると広い農地を1人で管理することは難しく、自分が食べるだけの野菜は何とか作ることができるが、それ以外は親戚や公社に依頼していることがわかる。2人の子どもたちは、近くに居住している人もいるが、農業の手伝いまでは出来ていない。今後の農地の維持には課題が残る。

### ・訪問者の存在

Aさん

「社協の人が月に1回弁当こさえて来てくれたり、前は、料理教室とかなんとか出よりましたから、あとはみんなが何して、話しながら、あのーいだけきよりましたけど。私もたいてい、体の体調崩しまして、入退院したりしよったから、それからあまり出ないようになりました。」

Bさん

「たまに民生委員さんが。具合が悪かったりなんかすれば、別じゃけど、あんまり来てない、あんまり普通は来ちゃないですね。昔は友達が出来たりしたけど、みんな年配になられたからね。病気になられたり、亡くなられたりもしましてね。」

前述の「毎日楽しみにしていること」には、他者との交流があったが、自ら他者との交流を求めて外出するということが主であった。ここでは、訪問者の存在について語られている。2人とも自立した生活が出来ていることから、民生委員や社会福祉協議会の職員による訪問はあまりないようであった。しかし、2人が80歳を超えた高齢者であることと持病があることを鑑みると積極的なそれらの人々の訪問は必要である。また、Aさんは、以前料理教室に参加した時期もあったようだが、入退院によりその参加が途絶えてしまっている。料理教室の仲間などから訪問による積極的な参加の呼びかけも必要であり、その参加により他者との結びつきも再び築かれるこ

ととなる。

### 3-2 家族との関係

Aさん

「近くにいる娘は、月に1回は来ましようけど、もしかていう時には言うてくれてすぐでも来るから、なんの時は電話でもしたらすぐ来てくれます。」

Bさん

「一番近いところの娘が、まあなんぞという時には、用事がある時には、あれに相談します。ほいでまあ力になってくれますからね。」

2人に共通していることは、3人の子どもが存在し、そのうち1人は近くに居住していることである。この近くにいる子どもが比較的的交流のある家族であり、何かあったときの頼みの綱でもある。しかし、子どもたちにもそれぞれの生活があり、1人で暮らしている親の面倒をみることは二の次で、近くに居住している子どもで1か月に1回の訪問が精いっぱいであり、その他の子どもたちとは年に1回会えるか否かである。したがって子どもたちは、緊急事態が起きた時などに対応してくれる存在とは言い難い部分もある。しかし、家族による情緒的な交流は、他の誰も代わりにできるものではなく、電話などの通信手段を利用することによる頻繁な連絡は独居高齢者の孤独感を防ぐためにも有効かつ必要なことである。

### 3-3 現在の困りごと

Aさん

「いま割合、私もまあ幸せだろうとおもてたり、強気にはしちよりますけど。みんなして、近所の何もあの一何をしてくれるし、あの別にどこがなんじゃていうことを思うたことはあんまりありません。」

Bさん

「まあ、困ってるちゅうことは、まあ恐らく今はないです。私は、車がいっそよう乗らんでね。恥ずかしいこといね。車の免許でも取れちゅて

言いよっちゃけどね。まあ、1人がすればね、なんとか間に合わあとしくて、私も取る気になりますなんだ。まあ、自転車に乗るよりはみやすいよちゅうてから、言いよっちゃったけどね。取る気になりますなんでね。そやけどあの事故やなんか見ると、まあ取らんでもよかったやもしれんと思うたりね。まあまあ、今のところそう不便じゃあなあちゅうことはないです。まあまあ用事があるときには、かつかつまだねえ歩けますから。」

現在の困りごとについては、すぐには見当たることはないようであった。しかし、地区の交通の利便性を考えると、子どもに運転することは止められているものの自由に外出できるAさんと、限られた公共交通機関でしか外出ができないBさんとは、大きく違うようである。しかし、今は運転が可能なAさんもそれが出来なくなるとBさん以上に不便さを感じるかもしれない。高齢者が生活する上で、交通の利便性は重要な意味がある。

### 3-4 今後一人暮らしが維持できなくなったら

Aさん

「まだそれほど、みんなに手をとらなくても、やれる限りは、やろう。自分は、足は悪うても、おのずと歩くからちゅうてね、あの一やっちよります。」

Bさん

「まあなったらねえ、子どもが、そういう施設のところへばあちゃん入らなねて言いよりますから、つまりがまあ、そういうところに入らにゃと思っておくことはおりますけどね。」

Aさんについては、全く考えてないことはないだろうが、今はなんとか人の手を借りることを最小限に留めて、何とか出来るうちは今の生活を維持したい気持ちがわかる。また、Bさんについても子どもたちに迷惑をかけないためにも施設での生活になると思っていることがわかる。しかし、彼らの本心を

知るためにも元気で意思疎通が可能なうちから家族との話し合いをしておくことが必要である。なによりも本人の意思を尊重した最期までの生活を維持するために、家族の間で考えることが必要である。

### 3-5 D地区について最近思うこと

Aさん

「学校の先生が言うんで、子どもさんに声を掛けても知らん人のおじさんが声掛けたとか、あーいうこと言うてやら、もしか何しよったってまあ知らんふりして通るような状態なるわ、まあそうやけど田舎は、まあそんなことはすまいけど。だからあいさつは、『おはよう』て言うたら「おはよう」て言うてくれてやから、まあやっぱり田舎は田舎のええとこがあります。でも個人情報とかやらで、ゲートボールなんかで集まったら、あれはどうじゃろか、あれは来てじゃろか、どねえか、具合悪いんじゃないか、いや聞いてないよとか、今日はどこいっちゃったやろうて言うてね。聞いてどうじゃろかということもあります。」

Bさん

「だいたいのつながりは、ありますけどね。昔のじいちゃんばあちゃんがおるころのようにやないやっぱり若いしなったら違いますねえ。私、1人おって、つくづく思いますけどね。『あんた元気だがのう?』ちゅうて言うて声をかけあって。よう仕事でも、ね。するけど、今昔ほどじゃないような感じがしますよ。」

Aさん、Bさんの最期の語りの中で、D地区ならではの近隣住民同士の顔が見える関係があると感じておられるのと同時に、それは昔に比べると希薄化しつつあることも感じておられるようであった。同年代で共に励まし合って働いてきた世代の人たちが、1人ずついなくなる中、各家族も世代交代し、以前のような結びつきがなくなりつつあることもその要因であるだろう。今後も都市部にはない人々の結び

つきを維持するためにも、Aさんの参加されているゲードボールなどでの情報交換は有効な手段の1つでもある。

### 3-6 Cさんが語るD地区の様子

D地区について、中年世代のCさんはどのようにみておられるのか紹介したい。

「うちの子どもが小学生の頃、いまから大体20年前ぐらいですけど、学校は、1クラスですね。その頃は、学年は少なかったですけど、20人前後いました。だから小学校でも100人はいたんですけど、いま現在、何人ですかね。26人ぐらいですね。1、2年が単独で、3年から6年までが複式です。もっと昔の私が嫁に来た頃は、子ども会という組織がありまして、行事も盆踊りの時は仮装するというのを子どもたちで練って、自分たちでダンボールとかで作って、賑やかにやりました。けれども、今、子どもがいないので、そういう活動は見たことないですね。完璧な過疎化ですね。」

この地区もかつては、現在より多くの子どもたちの存在があり活気があったことがわかる。現在も地区の盆踊り大会はあるようだが、地区の子どもたちが参加するというより、祖父母の家に帰省した子どもや孫たちが参加することの方が多くなっているとのことであった。したがって、現在も子ども会は存在しているようであるが、この現状が続くと地区の子どもたちのための組織としての存続は難しいと考えられる。また、高等学校は地区内ではなく、市街地まで自転車や親御さんに送ってもらい通学しているとのことであったが、高等学校卒業後の進路状況についてCさんの知っておられる範囲で聞いてみた。

「高校を出てからこの地区に残る子どもは、ほとんどいないですね。役場に募集が出れば残る子どももいるかもしれませんが。働き口でもあれば地元に残りたいという子どももいるでしょうが。役場も毎年募集しているわけではないので、めったにいないですね。」

働く場所がないことが高等学校卒業後の進路に影響している。また、過疎化を進めている要因でもある。大学は、他県に出たとして、卒業後は地元に戻ろうとしても職場がないことにより戻るに帰れない現状があるようだ。また、平成17年の合併で萩市に移行したことにより、それまでの役場も支所となり、役場自体の募集がないことも就職を難しくしている要因かもしれない。また、農業が中心の地区でもあるため、新規就農者以外は農業を継ごうという子息もいないようである。

「田んぼの多くは高齢者の方々が細々と作ってらっしゃいます。で、もう自分では出来ないという方は、委託されておられます。昼間サラリーマンされてるところとかですね、つくってらっしゃって、だから消毒もヘリコプターで朝早くから、あの一動いてます。」

高齢期を迎え、先祖から受け継いだ土地を維持することは体力的にも難しく、限界を迎えた際地区内の親戚に頼める人もいれば、そのような人が存在しない場合は、農業公社の仲介により委託されているようである。受託した人の中には、昼間自分の土地での農作業がある人やサラリーマンとして働いている人もいるため、朝早くから他人の農地を手伝う人もいるようである。

また、この地区の高齢者（特に独居高齢者）が生活の中で困難を抱えることの1つとして、墓参りがあることもCさんは語られた。

「お盆の時期になると、自分が嫁いだ先のお墓を参ることはもちろんですが、実家のお墓も守りする人がいなく、両方の墓参りが必要になるけれど、どちらも高台にあたりすると足腰の弱っているお年寄りには苦痛のようで、息子さんたちが帰ってきてやっとなで連れて行ってもらえるみたいですよ。であの一息子さん came たら、もうびっしりスケジュールが、朝から何をして、お墓に行って、お寺参りして、自分ともお寺参りして、

何をしてって全部、はい、こなしますっておっしゃいますね。」

特に配偶者を亡くした女性は、嫁ぎ先の先祖代々の墓を守るのと同時に実家も守る人がいなければ、どちらの墓も維持管理をしなければならぬという現状がある。これは地方に限ったことではないが、この地区は、自宅の近くの小高いところに墓があり、そこに1人で行くには、かなり困難があるようだ。したがって息子などが帰省した際に集中して、墓参りなどをすることとなり、帰省中に多くのことを息子にお願いすることにもなるため、その時はかなり忙しいようである。また、地区に住む独居高齢者が亡くなられた後の問題もあるようだ。

「息子さんたちが外に出られていて、この地区の親御さんが亡くされると、あるお寺では墓の中身ごと持って行かれたりしていますね。石は持って行かれないので、あの一中を全部業者の方で、墓をあの前にもうないですよっていう印で、墓を横にされて、あの持っていかれた方が、結構ございますね。私が嫁いだ頃は、珍しかったのですが、この前その近くに行きましたら、結構横になっていました。」

このように独居高齢者が亡くなった後、大切に維持・管理してきた墓をその次の世代が、同じ場所で維持・管理できない状況がある。外に出た息子たちは、親がいなくなった後は故郷へ帰ることはなく、ここで地縁が切れてしまう現実があるようだ。

最後に、この地区においても独居高齢者の孤独死が現実的な問題としてあることもCさんは語られていた。

「で、あの一やっぱり昔ながらのおじいちゃんおばあちゃんという方は、若い人がみんな出られて、お一人でいらっしゃって、お話聞いたら、亡くなられてもわからなかった。近所が1キロも何キロも離れてるんじゃないかと、なん百メートルちょっとしか離れてなかったんですけど、やっぱり、あ

の一それぞれの家庭がありますからね。で、おばあちゃんがお風呂で倒れてた。なにか、食べ物がようけ出来たから、ちょっと行ってみようっていうその時に気がつくぐらいで、でもあの一パトカーが来ますよね。そしたらみんなで『何があったの、何があったの』っていうそれでわかるぐらいって言ってんですよね。あとは、若い人というにしても若い人が昼間お仕事に出られてる間におばあちゃんが階段から落ちて、あの一亡くなられたという方もいらっしゃいましたね。」

このような問題は、都市部の独居高齢者や地域住民とのつながりが弱い人たちの問題として捉えられるが、地方のこのような地区においても現実問題として起こっていた。Aさん、Bさんのように一見元気に見えるが持病があり、自立した生活や人とのつながりがある人たちでも、同じような状況で最期を迎える可能性もある。したがって、毎日の人との交流が必要であり、独居高齢者全てに見守り活動が必要であることがわかる。Cさんの語りの中で亡くなられた人の例があったが、積極的な日中の見守り活動があれば死を防ぐことはできたかもしれない。

#### 4 おわりに

今回は、萩市D地区に住んでおられる独居高齢者へのインタビューであった。都市部では、近隣住民同士の関係が希薄化されている半面、D地区には昔ながらの近隣住民との結びつきがあった。そのことにより、独居高齢者の生活が支えられている部分もある。しかし、地区全体が高齢化している中で、このような人々の結びつきがいつまでも維持できるとは限らない。また、独居高齢者ご本人たちが、現在は困りごとはないという認識であったが、客観的に他人やD地区に居住していない者からすると決してそうではないこともある。本人たちの認識や表面的な状況から判断するのではなく、専門家などからみた適切な判断と行動そして支援体制が必要である。

今後の彼らの生活を支えるためにも地域住民がもつ意思の尊重と支援体制は両輪である。他者との交流が比較的ある方々であったが、寂しさを感じておられる部分もあった。それは、インタビューが終わったあとの2人に共通していたこととして「今日をよく話しから、よく寝られそうだ」という言葉の中にあった。そして、どことなく嬉しそうな表情も見られた。初対面の我々に対して、最初は遠慮がちであったが、話されているうちにそのような思いが消されたように感じた。高齢期の孤独といつも共存する生活は、その立場にならないと本質的に理解することは難しいだろう。しかし、彼らの生活や思いを明らかにしない限りは、独居高齢者の生活課題を明らかにすることはできない。

今回は、実質的には2名の独居高齢者に対してのインタビュー調査であり、この2人の語りを通じて、過疎の進んだD地区の独居高齢者の生活課題が確認できたとすることはできない。しかし、ご本人たちの生活の貴重な一部を聞かせていただき、そこには、どのような生活課題が潜んでいるのかの手がかりをつかめたことは、重要な意味を持つと考えられる。

## 謝辞

今回インタビュー調査をお引き受けいただき、ご自身の生活のことや地区のことなどの貴重なお話しをしていただきました3名の方々に感謝申し上げます。

また本研究は、恩師である山口県立大学名誉教授の志村哲郎先生との共同研究として始めました。先生の社会学者としての視点から、現代の高齢者の孤独死問題について地方と都市部のそれぞれの課題を深く分析することが目的でありました。しかし、先生は2015年7月に急逝され、残念ながら共同研究として継続することは難しくなりましたが、非常に微力ながら先生のご意志を引き継ぎたいと考えています。この場をかりまして、先生に対するご生前の公

私にわたる感謝とご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## 参考文献

- 1) NHK 無縁社会プロジェクト取材班；無縁社会——“無縁死” 三万二千人の衝撃，文藝春秋，2010
- 2) 藤森勝彦；単身急増社会の衝撃，日本経済新聞出版社，2010
- 3) 石田光規；孤立の社会学，勁草書房，2011
- 4) 萩市ホームページ；  
<http://www.city.hagi.lg.jp/soshiki/12/706.html>  
(2015年11月1日)